

# 資格開業の挑戦者達

行政書士 行政書士法人 山内事務所 山内隆司さん

Vol. 2

住宅新報社 岡部 靖

## 資格登録までの長い道のり

東京・巣鴨。お年寄りでにぎわう「とげぬき地蔵」にほど近い魚屋さんの2階に山内隆司さんの事務所はある。庶民的な商店街に面した事務所は「巣鴨まちかど相談室」を併設し、「街の法律家」としての身近さが感じられる。

山内さんは現在30歳。2年前に行政書士として登録し、同じ行政書士の父親とともに事務所を切り盛りしている。という、一見、環境が整っているかに思われるが、山内さんが行政書士に登録するまでには長い道のりがあった。

山内さんは22歳の時に父親のもとで補助者として働くことになり、この業界へ進んだ。今は第一線で活躍する山内さんだが、「この道を選ぶにあたっては、最初から確固たる信念があったわけではありませんでした」と当時を振り返る。しかし、実務を重ね、補助者として顧客への訪問も行うようになると、次第にこの仕事の面白さが見えてくるようになったそうだ。

山内さんは、補助者として働き始めた年から行政書士の試験を受け始めた。短期合格を目指し、受験予備校に通っての受験だった。しかし、補助者をしながらの受験は時間との戦いであり、思うようにはいかなかったという。「年齢を重ねるにつれ仕事の比重が高くなり、学習との両立がどんどん難しくなっていました。最後の2年間は、自分が動かなければ何もまわらないくらい仕事にかかっていたので……」

その間、受験予備校を二度変えて試験に臨ん

だものの、合格通知は届かず、合格までに6回の試験を受けることになってしまった。「合格した最後の年は、もし受からなかったら転職する覚悟でした」というほど思い詰めていた。

しかし、仕事に深くかかわるほどに、この仕事に魅了されていった山内さんは、受験に苦勞した分、行政書士という仕事への思い入れが人一倍強い。「僕は、合格までに20代のほとんどを試験勉強に費やしてしまいました。正直いって、とても悔しく感じています。でも、それだけの思いで取った資格だからこそ、仕事にかけ熱意は絶対に負けないと思います」

## 依頼の仕事は断らない

「資格はお金を持ってきてはくれない。自分から取りに行くしかない。待っていても何も来ない」。そのため、山内さんは仕事の入り口として常日頃からのネットワークづくりが重要であると説く。ただし、そこでは単に人脈を築く以上の目標を設定する。「自分の名前をいつでもファーストコールされるよう心掛けること。何かあったときに『行政書士だから山内』ではなく、山内に相談すれば弁護士でも税理士でも紹介してくれる、すべての仕事の窓口として指名されることを念頭において過ごしています」

業務の進め方においても、その姿勢が変わりはない。たとえば、行政書士の作成できる書面は実に1万種類以上あるといわれている。自ずと自分の得意とする分野ができ上がっていく。しかし、山内さんは言う。「人によっては、自



山内隆司さん

## 単一資格へ特化し知識の追求を

ところで、多くの人が不安に感じるのが、この資格だけで本当に食べていけるのか、ということではないだろうか。これに対し、多くの受験書や受験予備校では「ダブルライセンスで特色を」と訴えることが多い。しかし、山内さんはこの考え方に異を唱える。「資格は1つあれば十分で、実際に行政書士だけでやっている人はいる。仕事の可能性が広がるという理由で複数の資格を取ることは必要ないと思っています。お客さまや他事業者が知りたいのは資格をたくさん持っていて業務範囲が広いではなく、ともかくあなたに何ができるのかということ」

行政書士として看板を掲げている以上、その業務範囲ではプロの対応が必要だが、それを超えてまでむやみにストライクゾーンを広げるのは得策ではないと山内さんは考えている。複数の資格を取って業務知識がばやけてしまうよりは、特定の資格に特化して、知識の質と量において先鋭化することのほうが信頼を得られるという考えからだ。

「大切なのは、その資格を持っているのが『その人』だということです。資格を持っていれば誰でも食べていけるわけではありません」。そのためには、勉強も大事だが、遊びやさまざまな体験を通して視野を広げ、自分自身を磨くことのほうが大事だと山内さんは訴える。「人間性を広げるためには、積極的に自分から足を運んだり、いろいろな人と出会って自分を磨いてもらうことが必要です。むしろ、そのことに力を入れることのほうが先決なのではないでしょうか」。そうした言葉から業務に対する熱意が自然と伝わってくる。山内さんの切磋琢磨の日々は続く。

分の専門分野を決めてしまう。しかし、専門を決めてしまえば、お客さまを限定してしまいます。だから、いろいろな依頼が来ますが、よほどでない限り仕事を断ることはしません」

実績のある仕事は受けやすい。しかし、実際には、初めての仕事や経験の少ない分野に依頼も当然ある。そのとき問口を狭めず、一から手続の方法をひもといていく。大変だが、こうした積み重ねがその後の財産となる。

「たとえば、やったことのない新しい仕事の依頼で、1時間後にお客さまのところに行かなくてはならないことがあります。資料を集めて、要点だけをピックアップして、手続のための要件を説明しなければならない。そんなとき1ページから100ページまで全部読んでいられません。そこから要点を抽出して的確に説明できるという対応力が大切なのです」

## 行政書士の魅力とは

行政書士の仕事は官公署へ提出する書類の作成業務という印象が強いが、山内さんはそれ以上に相談業務が大切であると考えている。

「行政書士は書類を提出することだけをよしとする『手続屋』では食べていきません。お客さまにアドバイスができるコンサルティングの力が必要です。そのためには、自分も経営者と同じ目線で法律以外の知識を持っていないと腹を割って話ができません」

そして、そのことこそが行政書士の大きな魅